

テクニクよりことばの力

子どもと受験④

2010 A 7/15

大村はま記念国語教育の会 事務局長



＝千葉県習志野市、高波淳撮影

「大村はま記念国語教育の会」事務局長

荻谷 夏子さん (53)

父の転勤で、中学1年の2学期に金沢市から東京の区立中に転校したら、独自の学習方法で知られた国語教師、大村はまがいたんです。当時63歳、中学生から見たらおばあさんで、退屈そうだなあと思ってたのに、最初の45分ではちゃんとスイッチが入る音がして引きこまれた。

大村教室には、ある研究者に「一種の出島」と評されたような固有の高い文化と目標がありました。指導は厳しいですよ。「チューリップを見てみきれい、桜を見てみきれいと言っ、そんな粗い神経ではつまらない」という人ですから。でも、ことばを、細かに、着実にとらえながら読み、考え、表現していく授業は、とにかく刺激的で面白かった。

大村の「40年後、この人たちのものになっているはずのことばの力を見てほしい」という姿勢は、多くの親や校長とは次元が異なっていました。職員室では孤立していたんです。

よう、「国語教師にはなるものじゃない」と言っていました。私はその後、東大国文科に進み、結城紬の職人になって、10年続けました。

私に娘が生まれた時、ことばの下の地は母がつくるという大村の言を思い出し、豊かな、魅力的なことばで娘には生き生きとした時間を過ごさ

せてやりたい。勉強だけでもなく、ただ楽しければいいというのでもない、手応えのある日々を。

受験に対する大村の考えは、例えば、自転車に力強く悠々と乗れるように育てておけば、多少の段差など乗り切って行けるだろう、というものでした。大は小を兼ねる、幅広く豊かなことばの力こそが生きる根幹で、学力の基盤でもあり、受験技術は枝葉だ。中学受験を決めた時期が遅めだったことや、家で晩ご飯を食べられる進学塾を選んだのは、大村の影響だったかもしれません。

受験させたのは、渋谷教育学園幕張中（渋谷）と東邦大付属東邦中。理由ですか、うちから近いのがその2校。ダメだったら公立に行こうね、と。渋谷は夫（教育社会学者の剛彦氏）が仕事で訪ね、「うちの子に合いそうだ」と話していたことが、事前情報と言えは言えるでしょうが。

結局、東邦は落ち、合格した渋谷に進学しました。偏差値的に言えば渋谷の方が高いのですが、試験の相性が良かったんだろうと思います。

夫は思想的に「公教育に期待する」立場だけに「ちょっとマズいかな、私学に進学したのは」と思ったようですが、娘の人生ですから。

彼女は今、国際基督教大3年。苦労しながらも生き生きと過ごしているようです。文化人類学を専攻し、卒論ではトイレの研究をするんだと意気込んでいます。

トイレで思い出しましたが、春に家族でパリに行った時、メトロの駅で私、おなか痛くなったんです。トイレが最新式で開け方が分からない。通りがかった地元の人の色々とつてくれてダメ。そしたら、娘が切符をドアの溝に差し込んでシュッと滑らせ、見事に開けてくれた。

「次のステージに行くには、持っているアイテムを使うのがゲームの基本でしょ、お母さん」

うん、ものを考えられる娘になったなあ、と嬉しかったですね。

（聞き手・鈴木繁）